

3

A single dog was running around the town with a big chunk of meat in its mouth.

The dog stole that meat from a butcher's shop just a little while before.

After escaping from a butcher's shop clerk, the dog came to a small bridge that went towards the town's gate.



5

"Alright. I've run far enough.  
There should be nobody chasing  
after me anymore."

The dog stopped and happen to look  
under the bridge.

And so, on the water surface, there was  
also a dog holding a chunk of meat and  
looking back at it.

Although that was simply a reflection of  
itself that appeared on the water surface,  
the dog couldn't know such a thing.





いっぴきの いぬが、くちに おおきな  
にくの かたまりを くわえて、  
まちの なかを はしっていました。

この にくは ついさきほど、  
にくやの みせさきから  
ぬすんだもの です。

おいかけてきた  
にくやの てんいんを ふりきり、  
いぬは まちの いりぐちに かかる、  
ちいさな はしの うえまで  
やってきました。



「さてと。ここまで くれれば、  
もう おいかけて こないだろう」

たちどまった いぬは、  
ふと はしの したを のぞきこみました。

すると かわの みずの なかに、  
じぶんと おなじように  
にくを くわえている いぬが いて、  
じっと こっちを みているのです。

それは、じぶんの すがたが すいめんに  
うつっている だけだったのですが、  
もちろん いぬには そんなことは  
わかりません。



